◎特集

夜の景観を住民主体でつくる

― 金山町ライトアップが目指すこと ―

◇特別寄稿　小林茂雄　東京都市大学工学部建築学科　教授

「金山らしい風景を夜に映し出してみたい。」
景観施策に新たな光を射した街並みライトアップの『いままで』と『これから』をお伝えします。

金山町ライトアップ誕生のきっかけ

私と同じ職場（東京都市大学建築学科）の住吉洋一先生（現在は名誉教授）から10年ほど前に、「山形の金山であかりづくりの実験をしてみない？」と声をかけられました。当時私たちは、富山県の八尾町や岐阜県の白川村で、街のあかりづくりの取り組みをしていて、成果を卒業論文として発表していました。その内容を見たときに、「これは金山にピッタリの方法だ」と思われたようです。

私たちは平成23年7月にはじめて金山町を訪れました。上台峠を越えた瞬間に「別世界に入った」という印象を持ったことを憶えています。大堰が流れる水路の美しさと白壁の金山住宅の風格ある佇まいに心を打たれただけでなく、庭園や広場が周辺の道路とも学校とも住宅とも自由に行き来ができるということに驚きました。このような町はそれまで体験したことがありませんでした。町の人々は水路沿いを散策し、休憩所はくつろぎの空間として交流が行われていました。

しかし夜になると、人通りが途絶え、散策したり休憩したりする人はほとんど見かけなくなったのです。街路灯のあかりは暗く冷たく無機的な印象を形成し、昼間に見えていた大堰や金山住宅、蔵などの景観要素はあまり感じられませんでした。人が暮らしているという様子も感じられにくいものでした。私たちにできることなら、金山らしい風景を夜に映し出してみたいと思うようになりました。

○新たな試みとして、今年度から実施した金山住宅へのあかりの設置。
４月から10月までの間、柔らかくあたたかな光がまちを照らしました。

あかりはあくまで背景
景観と人の暮らしを照らす

ライトアップの手法

平成25年10月に大堰公園でライトアップの試験点灯を行い、平成25年の4月から本格的に開始することになりました。当初は大堰公園だけをライトアップしていましたが、徐々に範囲を増やし、平成27年からは、きごころ橋、街並み交流広場、蔵史館、八幡公園、八幡神社、マルコの蔵などもライトアップしています。

テーマパークや歴史の乏しい観光地のように、無数の電飾で飾ったり煌々と強い光で照らしたりするのでは、金山の魅力を逆に損なうことになると考えました。あかりを目立たせるのではなく、あかりが背景になって、「金山の景観と人の暮らしが感じられる」ようなライトアップをすることを目指しました。

水路や池には、水面の映り込みを考慮しながら小さなあかりを配置していきました。竹の杭を斜めに打ち込むことによって、できるだけ水面に近い位置にあかりがくるようにしています。点々とした揺れるあかりは、散策する人をいざないます。神社の本殿や鳥居、漆喰の白い土蔵、古くからある大木、金山杉の丸太でつくられた塀など、金山特有の景観要素を小型の光源を使ってライトアップしました。水際にある樹木は、水面へはっきりと映り込むようにしています。町を流れる水の美しさを反射光によって感じてもらうようにしているのです。

建物や休憩所の軒先には、住民手作りのシェードを被せた吊行灯を設置しました。金山杉の塀のテクスチャと合わせるため、シェードには麻ひもなどの自然素材を用いています。内部の人の気配を外部に表出することにもなり、建物の防犯性を高める働きもします。

ライトアップされた大堰公園。水面に映るあかりが幻想的。

大堰遊歩道。軒先の吊行灯から放たれる光が、散策する人を優しくいざないます。

ライトアップによる効果

昨年、34名の住民の方にライトアップに関するアンケートを行った結果、33名（98％）の方から「夜の町が散策しやすくなった」との回答が得られ、32名（94％）の方から「金山の景観的特徴が表れている」との回答が得られました。また、「道自体は暗いけど、水や緑のあかりに導かれて歩くのが楽しくなった」「公園と住宅のあかりが連続していて町の風景に一体感ができた」「団らんする場ができたので、夜の交流も増えそう」という感想も得られました。路面を明るく照らすのではなく周辺の景観をライトアップすることで、風景を眺めながら夜にも散策しやすくなったのではないでしょうか。

また、これまで観光客などに実施されていた「街並み案内」が、ライトアップ期間中には夜間にも行われるようになりました。参加者は提灯を持って夜の町を巡ることもあるようです。他にも大堰公園などで「ライトアップを眺めながら音楽を聴くような夜のイベントを行いたい」というようなアイデアも出ているようです。

住民主体のあかりづくりへ

これまで3年間、私たちの研究室が中心となって、住民の皆様の協力をいただきながら金山町の中心部のあかりづくりを行ってきました。しかしこれからは徐々にこの活動を住民の皆さんの手に移していきたいと思います。金山の住民の力で夜のあかりづくりの活動が展開できれば、金山のかけがえのない街並みがもっと表出させられるとともに、愛着を感じる光が町全体に広がっていくことになるでしょう。そしてより継続した活動になるものと思います。

住民参加のあかりづくりの第一歩として、「吊行灯（シェード）づくりのワークショップ」を今年の10月に大堰公園と蔵史館で行いました。大堰公園では小学生を対象として、「金山三峰」を象徴するピラミッド型のシェードをつくってもらいました。蔵史館では人の暮らしを象徴する球状のシェードをつくってもらいました。このシェードは風船に針金を巻き付けるという少々難易度が高い工程があるのですが、参加した方々は特に苦戦する様子もなく簡単につくりあげていました。

平成29年のライトアップは4月下旬に設置をする予定です。2月に金山町を訪れ、もう一度吊行灯づくりのワークショップを行うことも考えています。あかりづくりをうまくバトンタッチできるように頑張ろうと思います。ぜひご協力をお願いいたします。

小学生を対象に実施したピラミッド型のシェードづくりの様子

◎吊行灯（つりあんどん）のつくり方を紹介します！

《材料》
- 麻ひも（4㎜）
- 針金（1.2㎜）
- 風船（9インチ）
- 木工用ボンド
- 水
- 紙コップ

《道具》
- はさみ
- ニッパー
- キリ
- ビニールテープ
- ビニールシート
- 空気入れ

1. 風船を膨らます
風船を直径約25cmになるまで膨らます。

2. 針金を巻く
針金の端を風船に固定する。針金を風船に押し付けるように巻いていく。バランス良く巻き、写真のように針金で球の型をつくる。

3. ボンド水をつくる
ボンドと水を4：6の割合でよく混ぜる。

4. 紙コップを加工する
紙コップ底の両端2か所に麻ひもが通る大きさの穴をあける。その紙コップをビニールシートの上に固定する。

5. 紙コップをセットする
紙コップに麻ひもを通した後ボンド水をそそぐ。

6. 麻ひもを巻く
紙コップから麻ひもを引き出しながら、風船に麻ひもを巻きつけていく。麻ひもが弛まず、密度が均等になるよう注意する。

7. 吊行灯を乾燥させる
短く切った針金を吊行灯の針金の一部に通して吊るし乾燥させる。（あらかじめ乾燥させるための場所を準備しておく）

8. 風船を取り除く
1日置き、乾燥させたら風船を割る。吊行灯についた風船は綺麗に取り除く。

9. 吊行灯に穴をあける
吊行灯から電球が入る大きさの穴を切り抜く。

10. 完成